

ねこの

猫養通信

第27号

平成九年

(1997)

4月15日発行

(年4回発行)

猫養庵袖下(月)

東明雅

歌仙一卷の中には月が三つも出てくる。その三つの月をそれぞれ、表現に変化のあるものとする為には、最小限、次のようなことは心得ておかねばなるまい。

①異名の月

月という字が使えない場合、中国伝来の月の異称、陰精・金精・銀盤・金鏡・金丸・氷輪・玉環・水鏡・夜光・飛鏡、その他数多いが、いずれも硬い漢語のイメージがあって、使いこなすのは難しい。

中国の伝説から来た桂花・桂男(月には桂の木があり兔が棲んでいると信じられていた)・玉兔・玄兔・兎影、また、玉蟾・金蟾・蟾蜍・蟾影(蟾が月に棲んで月を食い、このために月が欠けると言われた)、さらに嫦娥・霜娥・素娥(弓の名人の夫が西王母か

ら貰った不死の薬を盗んで飲み、月に逃げたという美人の名)などはロマンチックでおもしろく、度々用いられる。

しかし、それらよりも、さらえ男・盃の光・弓張・望くだり・蛾眉・待宵・望の夜・十五夜・三五夜・良夜・十六夜・既望・立待・十七夜・居待・臥待・寝待・更待・有明・廿日亥中・二十三夜・十三夜・後の今宵などを使うと、それだけで月の事になる。ただ、秋以外の月にも用いられるのは、蛾眉・弓張(上弦・下弦)・有明くらいであろうか。夏の月の形容に夏の霜がある。

②月齢による特徴

朔日の月 黒くて光はない

二日月 地平に低く、糸のように細い。

三日月 月の眉・眉月・新月・織月・蛾眉。

夕空にほっそり眉のように輝き、やがて沈んで行く。

弓張月 弦月・半月・片割月・月の弓・月の舟、上弦は七、八日ごろの宵月、下

弦は二十二、三日ごろの夜中すぎの月。

上弦は曲った方が右、直の方が左、下

弦はその反対である。

夕月夜 夕月・宵の月・宵月夜。宵の間だけ月のある夜、または月の出ている夕

暮。二日月から七、八日ごろまで。

待宵 小望月・十四夜。八月十四日の月。

名月 明月・満月・望月・今日の月・月今

宵・三五の月・十五夜・芋名月。望月

は入り日とはほぼ同じ時刻に上り、東西相望む意である。

良夜 八月十五夜・九月十三夜、ことに前者をいう場合が多い。

無月 雲のため月が見えないこと。

雨月 雨名月。名月が雨の為見えないこと。

十六夜 名月より三十分ばかり遅れて出る八月十六夜の月。既望。

立待月 十七夜の月。前夜より三十分ばかり遅れて七時ごろ出る。

居待月 八月十八日の月。立待の月から更に三十分遅れて出る。それを坐って待つ意味である。

臥待月 寝待の月。居待から三十分遅れて出る。寝て待つという意味。

更待月 亥中の月・廿日亥中。陰曆二十日の月。亥の正刻(午後十時)に出るのでこの名があるが、正しくはそれより少し早い。

有明月 有明・朝月夜・残る月・残月。十六夜以下は、夜はすでに明けても、月

は入らないで残っているのをいう。

真夜中の月 二十三夜。八月二十三夜の月。

下弦の月で夜半の十二時に上る。なお、二十三夜待は陰曆十月二十三日の月見。

後の月 十三夜・名残の月・二夜の月・後の今宵・豆名月・栗名月。陰曆九月十三夜の月をいう。二夜の月は十五夜と

あわせたものである。

信州佐久・啄木山荘の四季

水沢魚乙

二十年ほど前、北八ヶ岳の麓の小屋を手に入れ、愛用している。里外れから林道を少し登った小さな尾根に小屋はあり、落葉松と檜・栗・白樺などの混合林の中に沈みこんでいる。夏の間は鬱蒼たる緑陰のおかげで暑さ知らず、晩秋にはすっかり落葉するので、冬も小屋は日だまりの中でほっかりと温もる。しかし、冬、北八つの峰に日が隠れるのは午後三時ごろと早い。そのとたんに寒暖計はぐんぐん下がってたちまち零下である。

小屋のシーズンは四月に始まる。まだ時として春雪が舞ったりもするがごく淡い。

淡雪や木の蔭なりに消えのこる

そして、五月ともなれば辛夷（ヤマアラギという異名もある）が白い小さなリボンを精一杯に飾る。

辛夷咲く風軟らかき午後のこと

谷あひを光る風今過ぎゆきぬ

このころはまた山菜・野草の旬。山菜の帝王であるタラの芽や香り立つ山独活、山蔞、萱草、ギボシ、ツクシ、野蒜などなど。

野蒜引くやはらかき掌の乙女かな

やがて木々が芽ぶく。森の不思議さは、まず下草や灌木が芽ぶいて春光を十分楽しんだあとで、やっと喬木の芽ぶきが始まること。

自然の優しい心遣いが感じられる。そして小鳥が営巣期を迎える。

落葉松の芽ぶき濡らして雨かほる

囀りや芽ぶきの森を満たすほど

はじめ濃紫だった木々の梢がエメラルドグリーンに変わって行くともう初夏だ。

枝々に翡翠の粒や風薫る

さまざまな新緑を持つ山の髣

梅雨。雲も森の木々も悲しげだが、ちょっとした雲が薄れて日がのぞくと、たちまち波のような春蟬の合唱と、喜ばしげな小鳥の歌がはじける。森の心そのものが歌うようだ。

歌鳥のいのちのきはみ梅雨晴れ間

盛夏、森の外れの日ざしに鮮やかな朱を点ずる花がフシグロセンノウ。その花の艶やかさを肴に酒を汲もう。木漏れ日は季語になっていないが、私はいかにも夏らしい言葉だと思ふ。こんな新しい季語があってもいい。

木漏れ日や夢といふ酒酌みかはす

晴天続きの夏の日々も、いつのまにか晩夏に移りつつある。午後は必ずのように夕立。

遠雷の音しきりなる甲斐信濃

あめつちを包みこみたる大夕立

初夏から晩夏にかけて、鶯がひっきりなしに囀る。ここでは鶯は春のものではなく夏のものである。ただ、なんとなく歌が詠っているような気がする。ホケキヨウではなく、ホケキオなど鳴いたりするのだ。

夏鶯信州訛り森あちこち

山の秋は早い。八月末にはもう透明な秋風。

風の道尾花の海を走り行く

草原の雲崩れむとす吾亦紅

秋になると紫の花が多くなる。竜胆、草薺、松虫草、釣鐘ニンジン……その紫の花々が薄霧をまとう姿はまことに神秘的である。

逝く日々や霧に巻かれてトリカブト

十日ごと花移りゆく山の秋

そしていつのまにか花が幽かになり、代わって紅葉・黄葉が主役になる。

風の朝草紅葉の中歩みけり

秋の空黄金色の山いくつ持つ

その山を見上げると一面のトンボ。佐久ではこれをタカトンボと言うらしい。羽音もなく空満たす透明な羽は、精霊と見紛うばかり。蜻蛉の群れ音もなく空満たすそんな日々が続いた後は、冷たい秋雨。

秋時雨ひと粒ずつを聴く夜哉

山小屋に鼠とわれと秋寒と

ふと気づくと、下の谷川の瀬音が間近に聞こえるようになっていく。

落ち葉して流れの音の近まざる

もう小屋のシーズンも終わりに近い。秋雨はいつか小雪にかわり、山は動物たちの世界に戻りつつある。

冬ざれて雨急速に白くなる

こんもりと眠れる山を歩みけり

凍て雪に兎乱舞のあとしるく

雪晴れをひそと楽しむ群日雀

(作家)

連句事始

山田 美代子

十年余り、カルチャーセンターや産経学園で健康ヨーガを細々と教えながら、私も数多くの講座を受講してきました。中高年の生徒が多い仕事柄、健康・老後・生きがい等の本を読むことが多く、昨年読んだ式田和子さん（今は和子先生と呼べる幸せ！）の本の前書きの中に・・美しい日本語・・連句・・という言葉をを見つけ、「連句ってなあに？」と聞いても知らない友が多く、古典を教えている友人にやっと説明を受け（内心、これは宿題のない習い事だと思ってしまったのです）どんなものか体験してみようと思ひ、俳句を詠んだこともないのに受講生となり、十月からスタートしたのです。

イメージがまったく浮かんでこない、表現したものが575や77に凝縮できない、漢字・季語など、知らないことが多すぎることに気付いて愕然としました。反面、今まで無関心だった句から五感のイメージや心を感じ、感動を覚えるようになったのが第一歩です。

こんな素人でも、大胆にも楽しく受講できるのは明雅先生の大らかなお人柄ゆえの捌きの妙味、先輩の句の奥深さ、幅の広さ、連句の遊び心ゆえかしらと思っております。

いつか格調高く、ウィットに富んだ句が詠めたらと熱望しております。

連句一年生

秋山 志世子

憧れの「連句」、それも東明雅先生の入門講座を受ける機会に恵まれ、丁度一年が経ちました。なにかも新鮮で久しぶりに心おどる思いでした。何百年もの間受け継がれてきた連句のきまりの複雑さと、質量に圧倒され眩暈を感じつつも、歯切れ良く、深く温かい講義と実作指導の二時間は、緊張のうちにあっというまに過ぎてしまいます。

昨年四月二十五日に行われた「亀戸天神藤祭奉納正式俳諧」に、入会したばかりの私は見学のつもりでしたが、欠席の方がいるからと中に入れて頂き、古式に則る絵巻のような興行の始終を拝見し、感銘を受けました。そのあとに行われた二十韻の連衆に加えて頂き、右も左もわからない新入りを皆様に親切にご指導下さいましたことは大変嬉しく、忘れることができません。

先輩に教えて頂いた「連句入門」「連句辞典」は早速求めましたがなかなか馴染めませんでした。最近ようやく面白くなって、引き込まれるように読み始めました。ゆっくりながら確実に連句の虜になって行くような気がします。自在な発想、豊かな知識をお持ちの皆様の間において、時折は凡の一句でも作ることが出来れば幸いと思えます。

文音あれこれ

佛淵 健悟

連句上達には付合いの経験を多く持つことが一番であろうが、仲間がいなかったり、席に出る時間がない場合、文音という手段は重宝である。魅力的な先達がいたら、「文音をお願いしたいのですが・・」と思いを申し述べれば、大抵O・Kして貰えるようである。

文字通り、手取り足取り、初心の人に親切を尽くしてくれる人が連句に多いのは事実である。「競争」より「共奏」の方にどちらかといえば喜びを感じるタイプが集まるこの世界なので、それは不思議なことではない。

歌仙だと満尾するのに早く二月、長いと半年一年とかかる。長い航海の趣があるが、それだけにめでたく満尾した暁には何とも言えない達成感がある。自分の長所短所を落着いて吟味できるのも利点である。

付句の内容は多岐に渡り、例えば恋句というものも作らなければならぬ。大胆な恋句がハガキで届いたりすると、連句を知らない家の者はどう思うかとか、封書にすべきだったかとか、氣を揉むことがあるかも知れないけれど、門前の小僧、といつては悪いが、家の人にも連句への理解を深めてもらうと、フイクションはフイクションとして、その後は朗らかに文音も弾んでくるのである。楽しい文音。これも連句の徳といつていいのだろう。

歌仙「初懐紙」

東明雅 捌

風狂の夢燃え上れ初懐紙

明雅

松明けの川銀の逆浪

志世子

ピアノソ譜をめくる手のあたたかに啓子

新入生が急にむづかる

慎二

父と来て見あぐる山の朧月

洋子

建設用地クレーンの影

ふみ

暴落の株に溜息つくばかり

千寿子

悪女といへど幼な顔にて

二

ポケベルの数字が語るラブコール

洋

ビンゴゲームでリーチぞくぞく

み

駅出でて広東語から北京語に

啓

香港返還秒読みの夏

み

井戸の月親の代より流れ板

啓

鯖鮎を釣る兄と弟

志

新走り席一つ詰め友達に

二

心配御無用口癖が出る

啓

現世は花に風のひとごころ

千

ホスピス病棟朝の嘩

啓

バスステイキーキに春の苺のせ

ふ

少年の漕ぐ青い自転車

洋

微かなる信号音が宇宙から

同

神代杉のうろを住居に

啓

真夜中に油なめたる妻の舌

千

首にじつとりからむ黒髪

啓

置炬燵依頼原稿はかどらず

ふ

漱石山房猫のお墓も

志

外人に和製英語の意味教へ

二

ミートソースで喰べる新蕎麦

洋

月の宴面影にみる母遠し

志

爺が丹精蟋蟀の壺

二

床下に金がざくざく草の庵

ふ

「レイヤー」といふ香水が好き

啓

カラ出張カラオケよりも古くから

二

旅芸人の帽廻しゐて

啓

辻が花小袖を濡らす花の雨

二

都大路をのどやかな輿

雅

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

二

連衆 秋山志世子 岩井啓子 鈴木慎二

大島洋子 中村ふみ 紺野千寿子

歌仙「藍微塵」

大窪瑞枝 捌

深川の句会始や藍微塵

瑞枝

鳥総の松を飾る門先

路子

東風の窓ピアノレックスきりもなし

美恵

壊れしピエロ春惜しむ頃

香

斑野に影を落として三日の月

良彌

いつか家族となりしらの猫

子

父と子をめぐる主題で新人賞

彌

片耳ピアスやと認める

香

プリクラの小さき鮎から恋芽生へ

彌

罰一罰二それも気軽に

恵

吸ひつけばあなたまかせの小判鮫

子

懐手して月の出るまで

恵

黒船が来るぜよ平成維新ぜよ

子

少し遅れて鳩時計鳴る

香

シンデレラガラスの靴はフェラガモで

恵

お持ち帰りよ各々のごみ

同

遂に逢ふ花のさかりの薄墨に

香

葱坊主らとバスを待つ村

子

大寺で睨む瓦の鬼日永

香

金さへ出せば願ひ叶ふか

彌

人質に差し入れられし囲碁将棋

子

皆で囃す下手な逆立

恵

ネーミングうまい地ビールヒットして

彌

汗もしとどに刺青の野師

香

強さにはころりと参る女です

子

しがらみ外にふたり見る夢

枝

ちちる鳴きをり書庫の片隅

彌

暗々の月に吟せむ山陽詩

子

暁星祭に上げる御明かし

恵

そぞろ寒童となりし母笑ふ

香

俵の形に握るおむすび

恵

ドジャースを買ふは日本のどの会社

彌

インターネットですべてすませる

香

実ならぬ花頭たしめて芸の花

枝

絵屏風を抜け遊ぶ子雀

彌

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 倉本路子 山口美恵 若松香

佐藤良彌

歌仙「年の酒」 金久保淑子 捌

金箔の浮きては沈む年の酒 淑子
 御慶かはしつ取りし太箸 みづゑ
 流水に子等歓声を上ぐるらん 智恵
 枝にかかりてゆらり風船 安子
 畑打つ手止むるともなく月仰ぎ 水壺
 ゲートボールの御常連なり 富美
 地下鉄もバスもカードが通用し 安
 出会ひ頭の以心伝心 壺
 懐にぐいとさし込む大きな手 ゑ
 写経道場作務衣堂守 安
 宵の月芋銭の河童墨淡く 恵
 影も涼しく浜の干綱 美
 チョングーの自慢料理はライスカレー ゑ
 肥満に勝る健康はなし 壺
 調律の調音高く鳴らしゐて 恵
 カウチの猫の欠伸ながなが 同
 へりの影移りゆくなり花の山 美
 帰化を果たしてかげろふに伏す 壺
 春愁の掌に文鳥を遊ばせる ゑ
 転校生はすぐ餓鬼大将 恵
 どらえもん先祖はタンクタンクロー 壺
 メッキの剥げし時計チクタク 安
 冬帽子目深にかぶり異邦人 美
 始末に負へぬ重き海鼠は ゑ
 こりゃ凄いに廻ればバックシャン 安
 去り状に朱入れて返すな 壺
 ゲリラより更に強気な大統領 美

インカ遺跡に残る盛衰 安

天心の月に灯せる草屋にて 安
 十字架祭の神父裾引く 恵
 茸汁出勤はもう夫になし ゑ
 カフェテラスでシガーくゆらす 美
 日々変るトイレの壁の詰将棋 壺
 「脳内革命」買って積ん読 ゑ
 蹴鞠会の蹴上げし鞠の落花浴び 淑
 朝寝の夢に若かりし殿 恵
 平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館
 連衆 山口みづゑ 須田智恵 神谷安子
 今宮水壺 村田富美

立きわめく児を横抱きに保育園 淳

ヨード卵を順に鑑別 淳
 人質はいらぬ者からはね出され 淳
 棋譜の落書丹念に消す 悟
 花大樹活断層をひとまたぎ 康
 うからうららに壁の塗り替 み
 亀鳴くを聞こゆと撰家呟きぬ 淑
 阿吽に在す金剛の像 庸
 ラーメンをはふはふ啜る蚤の市 悟
 ナイキと決めてスニーカー履く み
 放火して百十九番愉快犯 淳
 酒に別腹ありと言へども 淑
 香港と上海の妻如何せん み
 札束抱く老いし青髭 淳
 即断の離婚会見嘘泣 庸
 寝姿山に衣干したし 淑
 望の月茸の城をくつきりと 庸
 遺言状の破らるる秋 悟
 やや寒のカランきりりと閉める癖 淑
 テトラポッドに重油ねばれる み
 鳩のごと飛び立つ言葉待つ詩人 悟
 初雷にはっと夢覚め 淳
 花の旅記憶をたどる寺家の里 悟
 縄文の土器てらす春灯 げ
 平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館
 連衆 吉村ゑみこ 上月淳子 久保田庸子
 佛淵健悟 浅賀淑代

歌仙「小正月」

式田 和子 捌

猫衰も還暦となる小正月

和子

新世紀まで続け雙六

道子

春浅き凧の河原に竿入れて

順子

連翹しだけ若きらの声

ますみ

有明に囀る鳥を当て合ひぬ

英二

コンテナー車の絶えぬ往来

政治

夏場所の番付表の刷り上がり

同道

藍の浴衣を指染めて逢ふ

同道

君と逢ふ為に生れて来たと言き

志

ウエルカムカード誰からかしら

順

贈賄にバイリンガルの秘書もつき

み

貧乏蔓と異名とる髭

二

水煙をほの浮かばせて月の塔

順

鈴虫しきり野外劇場

志

パリの歌加藤登紀子はほろと酔ひ

み

携帯ラジオでテロリスト聴く

道

園遊会お言葉賜ふ花の下

み

東風やはらかに裳裾ゆらして

道

裏町の晩霜重き杖をひき

二

座敷童子も賑ひの内

道

昼の地震甲冑かたと音立てる

順

執事しづしづアイスコーヒー

道

待ち兼ねて露台伝ひに忍び込み

二

彼に囁まれた恋の勳章

志

週二回丸のついてるカレンダー

み

セールでもつく消費税X

道

ぼろ市に賈の毛皮を買ひ叩き

二

西比利亜超えて露西亜風邪来る

順

流浪のサーカステント月着く

志

縦の社会の厳しうそ寒

順

老校長苛められつ児に糞虫を

志

漫画に描く宇宙戦争

二

夢の中ここは飛べると土を蹴り

み

ビルをつなぎて祀るお稲荷

順

うかりける人も浮かれる花の宴

和

大蛤を盛りし塗椀

二

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 加藤道子 和田順子 水鳥ますみ

日高英二 峯田政治

歌仙「鱈起し」

下鉢 清子 捌

一湾を絞り上げたり鱈起し

清子

藪巻すませ網整ふる漁夫

利子

アノラック土産の玩具とり出して

守男

カレンダーには予定びっしり

澄子

月仰ぐ夜勤帰りの長き影

一恵

溢れ蚊を打つ音の発止と

治子

背に乗りて祭文誦す牛祭

英子

晶子の歌を記す碑

澄

きりもなくささやく愛の飽きもせず

恵

情熱の酒ぐっと飲み干す

利

人質は大切ペルー思案中

澄

軒先近く蝙蝠が飛ぶ

利

びいどろに写れる月と児を眺め

男

整理すすまぬ古きアルバム

治

大リーグ移籍もくろむ投手たち

澄

円も株価も相場下落し

英

爛漫の花の枝垂るる滝桜

治

囀の中おかめひよっとこ

恵

春の山頂上きはめ髭笑ふ

男

名物茶店渋茶羊羹

治

チャリティーの輸入雑貨を買ひあさり

英

ヤングママまたバイク走らせ

恵

この頃の父交調の心電図

利

丑三つ刻に雪女郎立つ

恵

恋しやと枕屏風を引き廻し

同

芝居のはねて送迎のバス

男

歴代の宰相論もかまびすし

澄

店主のはたき只読みのわれ

男

大地震の身に入む神戸月皓々

利

無人の里にカンナ燃えゐる

治

茸狩に誘ひ出されしデイパック

恵

お経で明ける母のおつとめ

男

水と餌鸚哥の籠に減ってゆき

同

夢を売るひと夢を買ふひと

利

辻が花衣桁にかけて花疲れ

清

ひそと聞こゆる亀の鳴く声

恵

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 武村利子 近藤守男 八角澄子

山崎一恵 加藤治子 佐古英子

歌仙「深川」

杉内徒司

捌

深川や成るか成らぬか初懐紙

心新たに集ふ松明け

城の門牛車ゆるゆる過ぎゆきて

様変りたる橋のデザイン

絹を縫ふ母の手許に月の射し

爽やかに弾く琴の優しさ

秋ふかし土器投げて試す運

彼と同棲まだ秘密なの

仲人も尊父母堂もレンタルで

土佐犬にして洋食が好き

五十年昔のことも語り合ひ

買ひそびれたるポロライド株

氷発見月の探査機クレメンタイン

冬眠泥鰌泡一つ吹く

外国の力士活躍めざましや

予想外れる景気回復

合掌の里に出遭へり花三分

招くが如き残雪の山

遠足の小学生は黄の帽子

らんぼうに塗るちびたクレヨン

樽酒を割りて開店祝ひたり

CDになる細道の地図

心敬の塚を掘る夢竹落葉

麦の黒穂をぽつぽつと抜く

後朝の鶏の空音にだまされる

手袋片っぽ落とす階段

沖はるか大島通ひ白き船

イタリー史書に埋もれる日々

競ひあふ教会の塔上る月

ふうせん葛ゆるる磨園

百一歳翁息災ちちろ鳴く

すべてOK孫のおねだり

入れ替へる魔法の杖の乾電池

気儘の旅に訪へる洛北

自転車の籠に落花のふりつもり

浅蜷蛭を売りあるく声

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 東郁子 近藤栗子 近藤蕉肝

内田麻子 船本志紅

歌仙「木の猿」

高橋豊美

捌

木の猿の埃もはらふ初懐紙

積み上げておく福引の品

春の旅出航のドラ響くらん

柔東風なづる幼児の髪

昼の月若草の丘寝転びて

土器のかけらの白く浮きだす

蝉の声読経の声のひたと合ふ

マリオネットの糸結びをり

思ひつめかなはぬ恋のストーカー

愛はお薬過ぎて毒薬

野太きがしなをつくって客をひく

バブル崩壊次は何やら

スフィンクス月に昔を語り出て

なぞなぞ話やや寒の頃

迷彩の服をほどいて冬支度

縁の下より掘る酒の甕

墨堤に花笠の輪の広がりにて

薄く霞める橋の数々

吊革の湿りはじめる夏隣

トムヤンクンの赤き囁りぬ *

啖呵売東北弁の異国人

渡る世間に鬼がぞろぞろ

古稀近くしみじみと見る運命線

清しこよ夜ちよっとお願ひ

子規庵の手前も奥も恋の宿

肌と肌間に重ねる

摘みたてのパセリ玉葱山と盛り

地球美はし水の惑星

老詩人撰集を編む後の月

連れ啼く鶴鳴聞かせよ

運動会いつもピリの子親離れ

テレビゲームをコンビニで売る

八十日間世界一週夢なりし

健康診断すべて上々

花盛り踏みしめてゆく登山道

浅瀬にカヌー憩ふうららか

*タイ料理で、すっぱく辛い海老のスープ

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 原田千町 長崎和代 中野昌子

古賀一郎 日高玲

歌仙「蒼穹に」 橋 文字 捌

蒼穹に富士仰ぎたり初懐紙

文字

御代の春とぞ鳥の歌声

紀子

クロッカス蕾の数のまた殖えて

あかり

新入社員縞のネクタイ

碧

月おぼろ点検了へし機械室

達子

顔に似合はずらくがんが好き

暁巳

ふとっちよの客を横目のペルシヤ猫

達

桂馬の鬼といつか呼ばるる

紀

雷が結んじまった腐れ縁

巳

神田祭に動く胎の嬰

り

近海は重油流れて荒れに荒れ

碧

大統領は酸素吸入

紀

渋柿のたわわに父の年忌来る

達

麓の村を渡る三日月

り

惜しみつつボジョレヌーボー振舞ひて

碧

ふとくちずさむ旧きシャンソン

巳

花疲れ通行止の橋の際

同

おたまじゃくしに後足出る

り

夢いっばい詰められてゐる石鹼玉

同

バーバーの椅子うつらうつらと

達

警官と税吏控ゆる右左

り

氷柱折れゆく鉄の門

紀

阿闍梨道急ぐ旅人北ならひ

碧

メッシュ染めたるかの美少年

紀

恋遊び携帯電話混線し

達

こむら返りのふたり後朝

紀

かんできの菓罐たぎりて月消ゆる

碧

蜂の仔取りの秘伝書くメモ

月明の角に店出す占師

ゲートボールキャプテン託つそぞろ寒

秋場所了へて帰る関取

組立式の軽き自転車

新走りボジョレ・ヌーボー呑みくらへ

ごみ袋透明にして涼し気に

白割烹着未だ現役

だんまり芝居黒子ひっそり

銅鐸に弥生をしのぶ花の苑

下町の古着鬻ぎの小金貯め

教授の肩に蝶のまつはる

けふも早よから励む竹踏

よなほこり黄色く吹いて旅鴉

生命在らば姥ともならむ花喰ふ

ゲリラ本拠の取材ばっちり

ふらここを漕ぐ幼姉妹

誰の作かナスカ地上絵謎解けず

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

大師講拜むしぐさは祖母に似て

連衆 椿紀子 中田あかり 松本碧

ふところにあるポーナスの嵩

篠原達子 島村暁巳

チェス盤に青息吐息降らせつつ

歌仙「年の春」 百武冬乃 捌

綿棒で突いてはだめよ閨の奥

富士筑波ほのと浮ぶや年の春

新作の落語発表月澄んで

野川の縁に御行はこべら

鴟の早贄何を思ふか

卒業の祝ひの卓をととのへて

懸煙草開拓のころ遥かなる

仔猫の寝床掃除する孫

村医自慢の長きあごひげ

朧月絵本のやうに屋根の上

超特急北に南に東西に

ポロンポロンとハーブつまびき

ちよくちよく覗くりサイクル市

懺悔室一輪活ける神父さま

花の昼吾子のハモニカ弾みをり

どの男にも愛の言葉を

うす塩仕立て烏貝の饅

ミラボー橋デジャヴユか妙になつかしく蓉

平成九年一月十五日 於 江東区芭蕉記念館

ヘルシーフーズ鮎を食べ過ぎ

連衆 杉山壽子 橋野代々子 豊田好敏

農産品遺伝子組替しきりなり

五味蓉子 市野沢弘子

幽霊会社高層の中

内田 麻子

昭和五十六年四月、朝日カルチャーに連句教室が開かれてから数えても、もう十五年の月日が流れました。その間猫養会の発展はもとよりの事、全国にいろいろの連句結社の座

が出来て、連句の世界も格段の飛躍を遂げて参りました。東明雅師の下勉強を重ねて来た猫養の仲間達・・・教室のはじめの頃は、先生の「四句目は軽く付けるのが良いのだよ、猫とかお茶とか・・・」と仰せられたのを真向に受けて、猫養連衆の作品には驚くばかり四句目に猫が出て来ると外部の人に指摘され、あっと気が付く場面もあつたりしました。その間に巻かれた作品は膨大なものになっておりますが、十五年の月日は又この連句をどのように導いて行くのが良いのか、若い人達の新しい感覚をどのように生かして行ったらよいか、マンネリ化して行く部分を如何に新しいものにして行けるか、連句全体のかもし出す诗情はどのようになればよいのか、等々幾多の疑問につき当たつてもいると思います。連句の未来は未知数のこととして、この疑問の答になるかどうか、私は短歌を長年作つて来た者として、連句の原点である連歌の時代を探つてみたいと思います。

和歌から連歌が生れ、俳諧の連歌が俳諧、

即ち今日の連句が生れ、俳諧の発句から俳句が生れたのですから、この一連の流れは、大河のようにつながっていると思います。

今日連句人は俳句をたしなむ人が最も多いと思ひますが、短歌から連句を楽しむ人も増えております。敢えて連歌のはじまりから五項目に分けて書いてみたいと思ひます。

- I 連歌という文芸の発生の基盤
- II 平安朝の一句連歌より鎖連歌の発生
- III 鎌倉期の賦物中心の連歌
- IV 南北朝期の去嫌中心の連歌
- V 明月記にみる定家の連歌

I 連歌の発生と基盤

わが国に古くから「尻取り」「後取り」と云う遊びがあつて、犬いぬ・鶴つる・蝦えび・雁かりなどをつづける遊戯である。同じように室町期十五世紀の半ば頃、文字鎖と云う文学的な遊びが流行し、御陽成院御製と伝える「いろは文字鎖」は「色よき石榴いちじく・轆轤りくろひく縄なは・花さける谷や・庭の朝顔あさがお・仏の教へ下手に射る的のり・ののように尾音と頭音を同音でつなぎしかも頭音はいろはにほへとで統一されている。こうした遊びは単に同音やいろは文字で続くだけで内容的な関連はないが、同じ文字鎖の中にも「源氏巻次第」とか「節会文字鎖」「御

所文鎖」はそれぞれ源氏物語の巻名、正月から十二月までの年中行事、御所御殿の名称を初句から順次詠みこんだもので、内容的に統一と制約がある。連歌とか俳諧とか云われる文芸の基盤はこの様な遊びと同一のもので、それが出来る。宗祇は連歌の特質を、

連歌は、先世上の雑談の返答をなすに似たり。さても昨日の風はいかめしく吹つるかな、といひ侍らば、さこそ、いづくの花も残らず散つらめ、などと返答をしたるやうにあるべき也。又至極の後は、西といへば東と答ふるやうに句をなす物なり。

(宗祇初学抄)

と連句は問答対話に同じだという。

問答とは問によって答が生れるもので、連歌も前句の意味や表現に応じて付け合され、前句はつねに次句の発想の場であり、前提である。即ち人は、与えられた前句を各人なりに様々に理会し享受する。その理会された心象や情趣・内容が基になって、その中から浮び上るように、あるいは映発し、響きあうようにして、新しい表彰世界や情趣が連想され、美しい装や表現をもって付句が制作されていく。

中世の他の文芸、申楽・狂言・茶湯・立花・歌謡・説話なども、必ず会席、多人数が合してともに創作と鑑賞をかねながら楽しむという形式が基本的な必須条件であつた。

英語連句の試み 花鳥風月(1)

浅賀 淑代

はじめに花の話題を。

花吹雪浴びつつボンゴ叩きつつ 明雅

水温みたり草魚四尺 牛耳

この付け合いは、故野村牛耳氏の傘寿のお祝いに巻かれた歌仙「傘齡の春」の句いの花の句と挙句です。僭越ながら、明雅先生の花の句の英訳を試みてみましょう。(ボンゴは中南米音楽などに用いられる、一对の小太鼓を並べてつなぎ合わせた楽器です。)

receiving petals

drumming bongoes

これでは短句のように見えませぬ。英語連句では、長句は3行、短句は2行で表記することが、一般的なようです。では、

in a storm

of the blossoms, I'm

drumming bongoes

「句またがり」を意識して表現しましたが、いかがでしょうか。「ヨ」とすると「自」の句に限定されてしまいます・難しいですね。ところで、花は英語でflower(草木)または blossom(果樹の花)ですが、私たち日本の俳諧(連句)人がイメージするような象徴的な「花」は“blossoms”(晩春の季語)として「国際歳時記」(W・Jヒギンソン 著)

講談社インターナショナル刊)に扱われています。

しかしながら、英語の連句作品でblossomと言う場合、必ずしも、桜の花だけを指すのではなく、春に開花する樹木の花全般を指すようです。海外の自然環境を考えれば、そういう受け止め方もまた当然ともいえましょう。

とはいっても一方で、歌仙などでは、枝折の花には特定の種類の花を出しても、名残の花には、特定の花を暗示しない象徴的な“blossoms”を用いるといった傾向が最近の作品にみられます。

(初折)

havier than the rain (ph)

of magnolia blossoms--

their scent (モクレン)

(名残の折)

all at once (ast)

the blossoms by the parkway

the humming of bees (花)

(「Lunar New Yearの巻」より)

「花」に賞翫の意を込める日本の伝統がこどもも做われているのですね。さらに今後、国際連句実作の場で「正花」について論じられるようになれば、雑や他季の花の扱いはどうなるのでしょうか。また、例えば、花入れ(Flower vase)・花火(Fireworks)・花やか(Flower/brilliant)などの言葉はどう扱われていくのでしょうか。興味はつきません。

連句と酒 *

「盗み酒」

蒲原 志げ子

幼い頃、我が家には入れ代わり、立ち代わり、何の所縁か居候が居た。それが不思議な事に酒好きで当主は下戸に等しかったが、人様に酒振る舞いは大好きときていたからお客事ともなれば、「お任せ下さい」と居候君大張切り。酒樽の前に陣取り、片口を手に栓を口に一寸あてがいトクトクトク。

お燗の指図は堂に入ったもの、実験つきで静かに酒を注ぐ方法、やれ水圧がどうの、表面張力がどうの、と言いながら樽をかしげて、シヨロシヨロシヨロ。

見事な実演、立ち上る酒の香に、私はウットリ、ああ、やっぱり幼児教育って大切なんだ、と今頃気づくとは。そして後に見たものは、夜更けの台所で彼が密かに酒樽をかしげてシヨロシヨロシヨロ。

居候かじかむで注ぐ盗み酒

◇猫養会案内

▽猫養同人会 場所 旧古河庭園

日時 六月十八日(水)
十一時半～四時半

▽猫養会 場所 江東区芭蕉記念館

日時 七月十六日 正午より

書籍案内

○『猫養作品集Ⅶ』が出来上がりました。

〒二七七 柏市加賀二一十一

梅田利子 宛

○『現代歳時記』成屋出版 三七〇八円

金子兜太 黒田杏子 夏石番矢 編

* 各季節を月別に分類してあること、
「雑」の部を設けてあることが特徴。

天つ雁・水口豊次郎

杉内 徒司

「加舎白雄全集」出版記念会(昭和五十年五月十一日)席上披露する付廻歌仙の付け句依頼に二月五日中村俊定先生を訪問した折、「連句実作は、牧師の水口豊次郎先生に教わった。水口先生は実業人でもあり、俳号は天つ雁、天つ雁同門に宮本三郎氏がいる」等の話を伺った。

三月四日宮本三郎先生を訪問して、同じく「匂いの花」を依頼すると、近頃は実作をやらないので花の匂は重荷と謙遜され、平句を付けられた。(このため、この歌仙の匂いの花は後日久松潜一先生に付けて頂いた)。
最近、宮本先生の『蕉風俳諧論考』のはしがきに、「天つ雁」のことが左の如く書かれているのを知った。

「私が昭和十年前後から賛川他石と同年同郷の俳諧研究家で連句作者でもあった天つ雁・水口豊次郎翁とめぐり会う機縁を得たことにより、古俳諧の研究に立脚した理論と実作両面からの、翁の熱心な御指導をうけ、連句への関心をよび起こされた。私が師兄と頼む中村俊定氏との出会いも、実に翁の膝下においてであった。私が今日多少とも連句について発言し得るに至ったのも、一に翁の賜物である。しかるに、最後まで連句実作への抱負と

熱心をもちつづけた翁の負託について答えられずいるのは誠に心苦しい限りである。連句のみならず、私は翁との対座方式を通して、俳諧研究のあり方、人の世の生き方までを学んだ。つくづく俳諧という文学は、日常的、生活的なものだと思ふ。研究もそうあるべきだと思ふが、翁のような研究家はもう絶えて世に出ないであろう」。

以上のことから名を知った「天つ雁」を極最近加藤定彦教授の御好意から「天つ雁翁のことども 中村俊定」(昭和三十年稿)を入り手し得て、その小伝を知る事が出来た。

「水口豊次郎翁は静岡島田の人、少年時代を韭山の江川太郎左衛門に寄食して勉強された。早くキリスト教に心酔し、明治二十九年秋に上京、直ちに救世軍に投じて伝道にその情熱を傾けられた。翁は多能の人で、経営の方にもすぐれ、大正四年頃、東京建鉄(株)に入り、社の復興に力をつくされて重役に推される。昭和四年これを辞し、以来晩年までの一自由人となって、専ら幼少の頃からの数奇の道俳諧の研究に没頭し、多くの若い人々の連句の指導にあたった。

翁の俳諧の師は、伊豆の人瀧の本連水(明治十年没)。翁は常に芭蕉の作品を解剖してその蕉風たる所以を明らかにし、それを手本として指導するという風で、その研究的な態度にいつも啓発されました。今は忘れさられた翁の顕彰が必要だと関係者は思っている。



【Q】連句には「付け勝ち」と「膝送り」というやり方がありますが、それぞれどんな特徴があるのでしょうか。

【A】付け勝ちとは乱吟・出勝乱吟とも言って、付ける順番があらかじめ定まっていなくて、各句ごとに連衆すべてが付句を考え、それを宗匠が捌いて治定する。一巡のあとは、よい句を作ったものが何句でも採用され、付け進むやり方です。

これに対して、膝送りは一定の順序に従って付けて行くやり方で、両吟・三吟・四吟・五吟・六吟などの場合、それぞれ順序が決まっております。七吟の場合も原則的には一巡の順序をそのまま繰り返せばよいのですが、作品としての例はありません。

もともと、芭蕉時代の俳諧では五吟か六吟位が関の山で、七吟以上は滅多になかったからでありましょう。この傾向は明治・大正ごろの連句にまで続き、残っている連句もせいぜい三吟・四吟までが圧倒的です。これは昭和六年刊の「連句總覧」においても、確認される現象であります。

連句は昭和四十五年ごろから復興し、今日の隆盛に及んだのですが、このころになると、すでに膝送りのやり方を知った者もすくなくなり、また、一座の連衆の数も急に増え、六

・七名が普通、それ以上の場合も多くなりまして。それ故、出勝一辺倒の連句が流行するようになりまして。この方法は連衆が互いに競いあい、席に活気が出る反面、初心の者は付ける機会が少くない上に、連衆は付句の早さ・珍しさ・奇抜さを競って、ろくろく前句との付味、打越からの転じを考える余裕がなくなりかねません。

これに比べて膝送りは、各自その付番が回って来た時だけ付ければよく、他人が付いている時は、静かに一巻の進行を味わう余裕が出来、深みのある付句をする事が出来ます。

また、他人と句数を競争するという雑念から解放され、出勝にくらべ静かな落ちついた雰囲気を楽しみ、さらには本当の連衆心を味わうことが出来るでしょう。ただ、先に述べたように、八人以上の会では無理ですし、第一、自我意識の強い近代人にはあまり好まれないかも知れません。

ただ、膝送りは、連衆の各人がそれぞれ前句を捌き、さらに打越からの転じを考えて自分の付句を作らねばなりません。これは或程度連句をたしなみ、習熟した上でないと出来ないでしょう。経験・実力の乏しい者が膝送りの一座に加わると、当人も困り果るとともに、他の連衆も迷惑して互いに興がさめてしまいます。だから、五・六人の一座で興行する時は、あらかじめこれらの事をよく考えて、膝送りか付け勝ちか決めるべきでしょう。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

一万円 桃雅会

篠原達子

島村曉巳

金曜会

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫養基金

.....S.....S.....

あとがき

○ 今年は雨つづきの花。花見酒を過ごすことがなかったのだけはよいことでした。
○ 海外俳人の連句への思いの熱さについて聞く機会が多くなりました。「歎異抄」の、「おのおの十余ヶ国のさかひをこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御ころさし、ひとへに・・・」のくだりを思い出します。まさに求道心。越えられなかったのは言語の壁だったのか、想像力の壁だったのか。

季刊 「ねこみの通信」第二十七号

発行者 猫養連句会

編集人 〒一九五 町田市金井6-7-16

佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko